

# 本多貌下著書 (在庫品)

- 法華經講義 上下二卷 (賣切) 定價金 參 送料 拾四錢
  - 法華經要義 定價金 貳圓五拾錢 送料 拾二錢
  - 日蓮主義の本領 定價金 參圓八拾錢 送料 拾錢
  - 日蓮主義の心髓 定價金 參圓五拾錢 送料 拾六錢
  - 日蓮主義の精要 定價金 貳圓 送料 拾六錢
  - 聖語錄 定價金 貳圓 送料 拾六錢
- 以上「教」發行所へ御申込に限り定價の一割引、外に要送料

- 本感應妙を信じて 一冊八錢 送料三錢
- 法國冥合 同前

東京市外南品川町妙國寺内

## 「教」發行所

振替東京一〇九四〇番

昭和五年八月廿四日印刷開始  
昭和五年九月一日發行 (第四百二十六號)

不許證製

編輯兼發行人 儀部滿事  
印刷人 鈴木日雄  
印刷所 東京府在厚部品川町南品川百八十一番地  
電話高輪六〇二四番

發行所 統一行所  
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

統一定價		統一廣告料	
一冊	金貳拾錢	表紙一頁	金貳拾錢
半冊	金壹圓貳拾錢	一頁	金拾五錢
一ヶ月	金貳圓貳拾錢	四分一頁	金五錢
送料共	送料共	送料共	送料共
金貳圓	金貳圓	金貳圓	金貳圓

## 目次

- 道德の批判より見たる佛教 ..... 本多日生
- 天風三萬里紀行(其十三) ..... 小林日種
- 記事
- 野口上人の來信
- 各地教報
- 誌料領收
- 編輯室より

第三十五年十月號

# 統

# 一



# 道德の批判より見たる佛教

大僧正 本 多 日 生

## 一、緒 言

佛教は我國に傳播して以來すでに千四百年の歲月を経て、その間非常な發達を遂げたのであります。明治維新の前後より強い反對を受けて、即ち排佛論の勃興のために多大な打撃を蒙つたのであります。爾來今日に及んで、そこに一面には歐米思想の影響もあり、旁々佛教が十分にその眞價を發揚するに至つて居ないのであります。これは誠に慨嘆すべき事でありませう。此の事は獨り教のために憂ふるのみではない、日本の文化のために、將た又往いては世界人類の幸福のために、佛教の興隆復活は是非ともこれを爲し遂げなければならぬ聖業である

と思ふのであります。

明治維新當時に於ける破佛論の骨子となつて居るものは、佛教は道德に害ありといふ主張である、佛教は人倫綱常を破却するといふことを、水戸學派が中心となつて絶叫をしました、これに雷同附和して、佛教は道德に害ありといふ考を以て、遂に破佛論が勢力を占むるに至つたのであります。所がそれは佛教そのものの、本質を觀察したのではなくして、佛教の流弊たる、淨土宗一流の道德思想を軽く視たところ、又は禪學などの人生を超越したやうな考へ方に對して起つた非難であつたのであるが、その淨土門と禪學のやり方は二つとも佛教に於ては一種の誤解であると謂はなければならぬ。又その上に當時の各



宗いづれも佛教の神祕を主張するために、その教の有難さを説き切らうとするために、その教を奉ずる側の人達は道徳は要らない、功徳は要らない、善根は要らない、唯だ佛に依り教に依つて救はれるのだといふ風に、法の力、佛の力を骨張するがために、人間各自の道徳を輕視するやうな思想言論はなかなか廣く行はれたのであります、併ながらこれは孰れも一種のやり損ひであつて、正しい意味に佛教を宣傳するならば、如何に法力、佛力を説くにしても、人間の道徳行爲を否定したり、それを毀つけるやうな行き方は出て来る筈がない、左様な事は人類の文化に害があるばかりではない、釋尊の御本意に悖る所謂背教者であると謂つて宜いのであります。淨土門にもせよ、禪學にもせよ、所謂超倫理であるとか超國家であるとか、或は善根功徳は不用であるとかいふやうな行き方は、全然佛教を謬つたものであります。随つてその誤謬を捉へて、それが佛教の本質

である、全體であると考へて排佛論を主張したる儒者達も、やはり佛教に對して不明の人と言はなければならぬ。所がその不明なるものが今尙ほ除かれて居ないのである、その儒者輩の思想が日本の支配階級に傳はつて、教育者も官吏も、その他世の中に物議らしい顔をして居る者は、今尙ほ佛教は何だか文化に害がある、道徳に害があるといふ考を有つて居る。宗教は人間に必要なものである、文化に必要なものであるけれども、どうも佛教を復活すればその内に毒素があつて道徳を破壊する……といふので、所謂痛し痒しの有様で、どうも宗教の必要を主張するやうなもの、大いに警戒しなければならぬといふやうな譯で、一進一退、日本の現狀に於ては佛教に對する態度が決定されて居ないのであります。それは佛教に就ての觀察が足らざる爲に起るところの一種の迷想であつて、その迷想を承繼いで居るところの舊套で

あります。又佛教徒の中にも、維新の當時あの如き多大な打撃を受けて、佛教はそれが爲に足腰が立たないかの如くになつたその有力なる非難をも顧みずして、今も尙ほ法力佛力を骨張し過ぎて、文化を害し道徳を罵るやうな態度に居る者は、これは餘りに無自覺の輩であると謂はなければならぬ。それ故に茲に佛教の本旨よりして、その非難者も、またさういふ流弊を生んだ佛教徒も、共に誤つて居るといふことを明かにして置きたいと思ふ。

の本旨にも合はぬと、今吾輩が言ふやうな事柄を十分に考慮されたものである。それは御遺文の上に明かに窺ふことが出来る、即ち御遺文の一番初めに擧つて居るのは、まだ宗旨などをお建てにならない、鎌倉で勉學せられて房州へ歸られた時に書かれたもので、「戒體即身成佛義」と題する文章であるが、これは日蓮聖人二十一歳の時の著作であります、聖人の宗旨を立てられたのは三十二歳の時でありますから、立宗に先づこと十三年も前に、まだ比叡山にも勉強に行かない前に書かれたものであります。その次に書かれて居るのは「戒法門」といふ文章で、やはり三十二歳の時の著作であるが、これ等の二書はその表題にあるが如く、戒法門といふことは道徳上の問題である、戒體義といふこともやはり道徳上の問題であるが、それに非常に力を入れて自分の意見を發表されて居る。その中に、チヨウと今申す通りに淨土門などが道徳を輕く視て行くのは大きな間違

それら廣くは佛教の經典に依つて論證するのであります、先づ日蓮聖人の態度を最初に一言して置きたい。日蓮聖人はやはりこの問題に就て最初から注意を拂はれた方である、聖人の當時には一方に淨土門が跋扈して居り、また禪學も勢力を得て居つたが、その行き方は後の儒者が非難する通り道徳を無視し、現實を侮辱したやうな行き方をして居つたので、日蓮聖人は、これでは文化にも害があり、佛教

である、全體であると考へて排佛論を主張したる儒者達も、やはり佛教に對して不明の人と言はなければならぬ。所がその不明なるものが今尙ほ除かれて居ないのである、その儒者輩の思想が日本の支配階級に傳はつて、教育者も官吏も、その他世の中に物議らしい顔をして居る者は、今尙ほ佛教は何だか文化に害がある、道徳に害があるといふ考を有つて居る。宗教は人間に必要なものである、文化に必要なものであるけれども、どうも佛教を復活すればその内に毒素があつて道徳を破壊する……といふので、所謂痛し痒しの有様で、どうも宗教の必要を主張するやうなもの、大いに警戒しなければならぬといふやうな譯で、一進一退、日本の現狀に於ては佛教に對する態度が決定されて居ないのであります。それは佛教に就ての觀察が足らざる爲に起るところの一種の迷想であつて、その迷想を承繼いで居るところの舊套で



ひだといふことを書かれて居るのであります。即ち「戒法門」の中に、

「淨土宗の學者傳教大師の釋を引けども、末法には持戒の者無しといふ釋の意を知らずして、人々を迷はす法門なり、恐るべし、恐るべし。」

(續遺) (三三)

と言はれて居る、この傳教大師の釋といふのは「末法燈明記」といふ書物に傳教大師が、末法は無戒である、戒を持ち得ない、末法に戒律を堅固に持つ者ありと言つたならば、市に虎あるが如し——東京の神田に虎が棲んで居るといふやうな譯で、それは無いことだといふことを書かれて居る。それを淨土宗の者が引いて、末法には戒律は無いと傳教も言つて居るではないか——そこでその戒といふものをズツと推擴げて、一切の道德といふものをその中に含めて、末法無戒なるが故に善根道德といふものは今日やれないものだといふ風に迷斷した、それを日蓮聖

飲んではいかんといふことは、これは世間の道德である。併しその五つの道德が根本になつて大乘の諸戒も具足つて來るのである。

「故に此の五戒をば具足根本業清淨戒と名く。」

(上同)

世間の道德が根本をなしてそれから餘の戒といふものは具足つて行くのである。

「若し此五戒破れれば一切の諸戒皆破る、五戒は破るといへども大乘の戒は持ちたりと云ふ事は無之。根本戒と名くるは此の故なり。」(上同)

世間の道德はやらぬけれども、佛法を信する特別な善根を積んで居る……そんな事が言へるものではない、人間の道德が根本であるから、それを振り切つてしまつて宗教特殊の道德といふ事を言ふのは間違つたことであると言はれて居る。これは實に日蓮聖人が佛教觀の上に於て傑出して居る點であります。それ故に後には「立正安國論」を書かれて、

人が攻撃されて居るのである。傳教の言ふ「末法無戒」といふことは、佛教の特殊の戒律を守ることにはなか／＼出來なくなつて來るといふ意味であつて、人間の道德までを否定する意味はあるべきものではない、然るに末法無戒といふ言葉を以て、一般の人間の行はねばならぬ道德までも要らぬものだといふ風に淨土宗の人々が言ひ出したのは、それは人々を迷はす教であるといふことを論難されて居るのであります。又同じ「戒法門」の中に、次のやうに言はれて居る、

「此の五戒を根本として大乘の諸戒も具足するなり。」(續遺) (二五)

五戒といふのは印度の一般の道德である、儒教で言へば人倫五常といふが如きもので、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒といふ五つを戒めた、無慈悲な事をしてものを殺してはいかん、盗みをしてはいかん、邪淫をしてはいかん、妄語を吐いてはいかん、酒を

「法師は諂曲にして人倫に迷惑し」(續遺) (三七)

と非難されて居る、大勢の坊さん達が根性がねちけて居つて、いろいろ面倒な事は言つて居るけれども、人倫道德を無視して居る、所謂破備論者が、佛教は人倫綱常を破却すと言つた、その人倫に迷惑をして、各宗の坊さん達が鎌倉へ來て、皇室の御威徳の衰へたること——北條氏が後鳥羽天皇を隠岐島に流し奉り、順徳天皇を佐渡島に流し奉るといふやうな惡逆無道の事をやつて居るのを咎めもしないで、鎌倉幕府から油揚げを買つてさうして北條の武運長久を禱るなどといふことは、日本に於ける大義名分を紊るところの態度である。唯だ癩病やみが可哀相だと言つたり、乞食が可哀相だと言つて物でも施して居れば、それが坊さんらしい、お慈悲の深い人だと思ふけれども、それは慈悲魔といつて、さういふ小さな親切を行つて人倫の大本を紊る者は許すべからざるものであるといふので、後には律國賊論ま



でも高調力説せられたのであります。その妙味を味はなければならぬ、下手をやると日蓮門下自身も、やはり同じやうに法の力、佛の力の方に傾き過ぎて、人倫道德を無視するやうな行き方をする者がある、又好んでそんな風の議論を吐いて國民思想を毀つけるやうな者も出来るのである。それは深く警戒しなければならぬ事でありませう。

それ故に今吾輩が語らんとする思想傾向といふものは、ナニも自分が事を好んで言ふのではない、又破佛論でやられたから據どころなしに出直すといふやうな意味で言ふのではない、佛敎の根本の思想、日蓮聖人の最初よりの着想が左様であつたから、その上に於て佛敎と道德との密接なる關係をお話ししようと思ふのであります。自分はこの問題に就ては既に三十年も前に、鎌倉に日蓮門下の講習會があつた時に、御遺文の中から日蓮聖人の倫理觀を抽出して講演をした事があるので、その時に今言ふやうな事

柄も皆これを擧げて詳細に論述して置いたのであつて、昨日や今日の思ひ着きではない。又その後大藏經を閲讀するに就ても、何千卷といふお經を大體拜讀したのであるが、その結果から考へても、今吾輩の述べる事柄は佛敎の本旨である。淨土宗がどう言つた、禪宗がどう言つたといふと、大きな宗旨になつて居るからナニか偉いやうに思ふ人があるけれども、これは一種の誤解である、佛敎宣傳の上に於ける失態であります。日蓮聖人は最初からその誤謬を指摘して「法師は詔曲にして人倫に迷惑し」といふ鐵鎚を下された譯であります。併し悲しい哉、間違つたものでも數が多いものであるから、局外から見れば佛敎そのものが道德を無視するかの如くに考へられて居る。今尙ほ、佛敎は人倫綱常を敬却すといふ非難の方が生きて居るやうな事になつて居るのであるが、これは實に慨嘆に堪へぬ事であつて、一面は佛様に對して申譯のない事であり、又一面は日

本の文化の上に大なる損害を與ふるものであると思ふのであります。

二、佛敎は徳敎なり

そこで先づ佛敎は徳敎なりといふことを明瞭にして置きたい。佛敎は宗教である、信仰を勸めたものであるといふことは誰しも考へる、それはそれに違ひないが、大體は佛敎がその儘道德敎である。自分の意見を以てすれば、宗教的の要素を除つてしまつた道德といふものは、單なる道德としても生命のな

ことになる。日本の敎でも、唯單に國體、忠孝といふ事だけ言つて居つたのでは、眞に日本の道德ではない、日本の道德は建國の昔に遡つて、敬神の觀念からそこには所謂宇宙の觀念といつて、この大宇宙に對して崇高なる觀念を有して、それが今度國體にうつり、皇室にうつり、さうして國民精神となつて居るのである。故に日本の神ながらの敎に就ても、宗教情操の部分を除つたならば本當の神ながらも、道德の生命が涸れるといふことは、その道に精しい人であつたならば、必ずその通りですと言つて吾輩の議論に賛成するであらう。經學をやつた者でも、やはり天道明徳の敎を除つたならば佛敎道德の生命が涸れるといふことは、本當の儒者ならば賛成するに違ひない。況んや佛敎は信仰を本にして道德を説くのであるが、その信仰と道德といふものは二分することの出来るものではない。



いふ道徳は、今日までとても駄目であつたが、今後の世の中に於ては一層効力が無くなるのである。今日學校などで教へる道徳が形式化して居るとか、言論化して實力が無いといふのは、宗教性を奪つてしまつて居るからである。どんな善い事を教へて置いても、教へて居る事は間違つて居ないけれども、それを實行する力といふものが無い、だから墮落して行く方の方に引摺られ、悪化する方の方に引摺られて負けてしまふ、そこで負ける位ならば、どんな善い事を知つて居つても役に立たない、大變結構な言ひ前だといつても、實際の力が無ければ駄目である。どんな正義でも、泥溝の中に抛り込まれてギヤフンと參つてしまふやうでは駄目である、正義にはやはり威力が伴つて初めて正義の効能がある。道徳もその悪化墮落する傾向に對抗する威力を有つて、それに打勝つて初めて道徳の價値ありと謂はなければならぬ。

だから完全な意味の道徳といふものは、寧ろ佛教のやうな信仰から鍛え上げて、さうして實際に善根を積ましむるものの方が、本格的道徳ナンである。間違つたものが多くなればやはり間違つた方が勢力を得るから、佛教を以て直ちに徳教であると言つても、イヤさうではないといふ風な頭腦が働いて、も、それはその人の頭腦が間違つて居るのである。今言ふ通り聖賢の教から見ても神ながらの道から見ても、又一般西洋の思想に就て考へても、やはり本當の力ある道徳といふものは宗教性に入らなければならぬものである。それは且らく別の話としても、さういふ所からも考へて佛教は徳教である、淨土門や禪宗の人の言ふやうに、有爲の善根は取るに足らぬとか、人間の功德や善根はどうでも宜いとか、そんな無茶な事を言ふべきものではないのである。佛教の一番最初に説かれた阿含經の中の増一阿含といふところに、七佛通戒と稱して、如何なる佛で

もそれが佛教の全體であるとして言ひ表はすところの一つの命題となつて居るものがある、それは何であるかといふと

「諸惡作すこと莫れ、衆善を奉行せよ、自から其の意を淨くす、是れ諸佛の教なり」。

といふ事を擧げてこれを非常に力強く説明されて居る。いろ／＼の悪い事をしてはいかん、いろ／＼の善い事をするのちや、それには自分の意を淨くして、その自覺から出發してやつて行くのだ、それが總ての佛の教である、教の根本であり全體であるといふことを細かく説明されて居る。これを見たならば佛教は徳教だといふことがよく判るのである。「そんな善などはどうでも宜い、何でもイヤナリ信心せよ」……といふ風な行き方をするのは一種の僻見である。信心といふことも一種の善根である、それが本になるといふことは言へるけれども、善根の中の一つとも言ひ得る譯である。又心地觀經に依ればや

はり戒の事を大切に説かれて居る、即ち

「佛法の海に入るには信を根本となす、生死の河を渡るには戒を船後となす」。

とあつて、この生死の迷を斷絶つて悟を開くに就ては、戒(即ち道徳)が船となり後となるものである、この道徳を除つてしまへば河を渡らんとして船が無いやうなもので、彼岸に達することは出来ない。「戒を船後となす」といふことは、佛教がどれほど道徳を重く考へて居るかといふ事がわかるのである。

又法華經の一番大事な壽量品に於て、本佛の御はたらきは何を目的にして居られるかといへば、即ち一切衆生をして善根を生ぜしめんが爲であると言はれて居る。善根といふことは道徳である、どういふ所から善根といふことが出たかといへば、儒教に於ても「仁義禮智、心に根す」と言つて、心の内にさういふ根があつてそれから芽を吹いて來るのである、人の心にそれだけのものを有つて居る、惻隱の



心無き者は人に非ざるなり、是非の心無き者は人に非ざるなり」といつて、即ち仁義禮智の心の根を有つて居る、それが芽生えて仁義禮智の道徳となつて出て來るのであると言はれて居る。その道徳のことを佛敎の方では善根と言つて居る、それが五つある、その中の一番初めが信根といつて信心を指すのである。(その五つの善根のことは後にお話しします) 毒量品には諸君が御承知の通り

「諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因縁、譬諭、言辭を以て種種に法を説く、所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず」。

とあつて、本佛が始なき以前より常住不離の御はたらきといふものは、諸の善根を生ぜしめんと欲する一つの目的に依つてはたらかれて居るのである、一切經を説くのも諸の善根を生ぜしめんが爲である、善根を輕視するといふやうなことはあるべきものではない、佛敎は一言にして言へば善根を生ぜしめん

が爲に起つたものである。淨土宗や禪宗のやうなものが出て來て、有爲の善根は取るに足らぬと言つたり、彌陀の本願には善根は要らぬと言つたりするやうな、變てこな理窟から出て來るから善根を否定するやうなことになるけれども、佛敎の原則といふものから言へばさういふ議論は横筋であつて、決して出て來る筈がない、行き過ぎて居ると言ふか、偏つて居るものである。大體佛敎に於ては「爲人生善」といふことが全體である、爲人といふのは、その人の個性に適するやうにして各々善根を生ぜしめようといふ事が、釋迦如來の種々に法を説かれたる所以であります。

それ故に那先經に於ては、彌蘭王といふ王様が、佛法はあまりにいろ／＼の事を説き過ぎて纏りが無いではないかといふ非難をしたときに、那先比丘が諄々として説いて居る。決してさうではない、佛敎は實によく纏つて居る、どう纏まつて居るかといへ

ば、人に善い事をさせようといふ點に於て佛敎は纏まつて居る、その善い事といふのも六善事といつて、第一には「誠信」といつて人間の誠心から出た信心を勤めるのである、その信心は濁れる水に珠を投するが如くに、その珠の功德に依つて水が澄む如くに、信心を人の心に起さしむれば濁つた心が澄むのである。第二には「孝順」といつて親孝行を勤めたものが佛法である、孝は城を築く基址の如く、如何なる大きな人間になるのでも親孝行から出發しなければならぬ、孝は百行の本である。第三には「善を念ふ」こと、續に香華を貰うが如くに、これ迄の善き事、新しき善き事を皆な重ね成して、倍々その善根を豊富に増大せんとするものである。第四には「精進」と稱して、それは恰も敵軍に破られんとして居る場合に援兵を送つて我が軍をして勝たしむるが如くに、善き志が弱つた場合に後から／＼と力づけてその正しき目的を達成せしむるもの、これを精

進と言ふのである。いま一つは「一心」と申して心を專注して事に當らなければならぬ、點滴の石を穿つが如くに、同一の所に向つて心を專注すれば非常な力が現はれて來るものである。更に第六の「智慧」を説くのも複雑なる事を言ふのではない、善きを探り惡しきを捨てるといふことが智慧であつて、恰も門を衛る人の如く、不爲のものは門内に入れないといふ、それが智慧である。この誠信、孝順、精進、念善、一心、智慧の六善事、これが佛敎の全體である、纏りが無いといふやうな事は決してありませんと説明したので、彌蘭王が非常に感心して那先比丘に歸依をせられたといふことが説いてある。

その他一切經にわたつて斯ういふ意味の經文を擧げたならば殆んど際限が無い、それは餘りに廣いことになるから、今しばらく増一阿含と、法華經の毒量品と、心地觀經と那先經とを引いて代表せしめたのであるが、斯ういふ經文の趣意を考へて見たなら



ば、佛教は徳教であるといふことに於て決して異議のあるべきものではない。然るに佛教を宣傳する者も變な事を言うたり、非難する者も不徹底な事を言うたりして、この偉大なる教を不得要領に考へて居るといふことは實に愚な事である。

### 三、佛教道德の根底

そこで進んで佛教道德の根底といふことを明かにして見たい。佛教の道德の根底は、第一は實在觀念に依つて立つて居るのである。自分自身に就ても、魂は死んでも消えない、始なく終なく不滅の生命を有つといふ事、また自分に相對する佛様もさうであるし、親にしても妻にしても皆實在者であるから、その實在觀念が基礎になつて道德といふものを立て、行くのである。ところが世間の普通の道德論に於てはさういふ事を考へない、生きて居る間だけの勝負ぢやと言ふ、その方が道德の本格で、死んで

湖が正氣の歌に、「死しては忠義の鬼となり極天皇基を護らん」と言つて居る、彼は排佛家であるけれども、死んだら消えるとは考へて居ない、やはり忠義の神となつて我が皇室を護らうと言つて居るのである。吉田松陰も排佛論者であるけれども、設ひ死んでも魂は留まると考へて居つたから、留魂録といふものを書いて居る、さうして自分が神様に祀れるやうな場合があつたら此の魂を神體にして呉れと言つて居るので、今の松陰神社はその赤間關で買つた硯を神體にして居るのである。その他破佛家と言はれる人でも、偉い人はみな魂は死んでも消えないと考へて居る、人間は死んだらそれきりぢやと言ふやうな者は、到底碌な者ではない。大石良雄をはじめ赤穂の浪士があれだけの義舉を斷行したのも、主人淺野内匠頭が自分の目的を達せずして死なれたといふことは定めし心残りであらう、その鬱積した事が魂に引かゝつてどうしても諦めがつくまい、

も魂が消えないなどといふのは特別な宗教の傾分だと考へて居る。さういふものではない、すべて哲學を基礎にして道德も宗教も批判されるのであるから、哲學に於ては生命の實在を論證して居る今日、道德が生命の問題を決定せずして道德論を立てるといふことは、甚だ早計な事である。若し生命は滅亡するとして道德を立てるならば、それは所謂唯物主義の道德であつて、今日以後は寧ろ危険思想の提灯持ちやと言はれても仕方がないのである。そんな不眞面目な、不確實な事を以て今後の道德は成立つものではない、だん／＼さういふ事に依つて佛教の方へ近づいて來なければならぬやうに追廻されて居る今日である。今までのやうな思想では到底うまく行かない、どうしても實在觀念に基いて行かなければ、大きな善い仕事は出來ないのである。

それは佛教を信じない人であつても、相當の人物は大抵さういふ考に至つて居るのである。藤田東

これはどうしても主人の鬱憤を霧らして魂を安んじて上げなければならぬといふ眞面目な考から、四十七士はあれだけの苦心をして義舉をやつたのである。現代の人がいゝ加減に口先で言つて居るやうな工合に、そんな事はどうでも宜いと思つて居つたならば、命を捨て、あれだけの美舉を取行することは出來やしない。これでどうぞ鬱憤をお霧し下さいと言つて、吉良義央の白髪首を泉岳寺に持參して淺野内匠頭の靈を慰めた、それは本當に、これで殿様は鬱結した胸心が解けたであらう、こんな嬉しい事はないと彼等四十七士は考へたのである。楠木正成が湊川で討死をするときに、雄志七世深しといつて、七たび生れて逆賊を滅ぼさんと言つた、その七たび生れ代つてといふことは、決して冗談で言つて居るのではない、今度はどうしても戦利あらずして湊川で討死をするけれども、七たび生れ代つても必ずや朝敵を滅ぼして見せると言つたのである。



乃木將軍も宗教はあまり好かぬ方の人であつたけれども、明治天皇の御崩御に會うて殉死をせられた、あれは乃木將軍に取つてはやはり實に觀念である、即ち「うつし世を神去りまし、大君の、みあと慕ひて我はゆくなり」といふ辞世の歌に現はれた通り、明治天皇の御供をして何處までも行くといふ決心である。そんな事は今の唯物主義の頭腦の人間には解りはしない。どうしても本當の道德といふものは生命の永存から考へなければならぬといふことは、オイケンなども近來さかんに主張したことで、それが爲に學界は非常な衝動を受けて居るのであるが、モウ少し精しく考へたら、實在觀念に基かなければ道德の根柢といふものは成立たぬといふ事は、直ちに理解さるべきことである。

佛敎は其點をハッキリ教へて居るのであつて、優婆塞戒經には「善男子よ、三法あり能く是の戒を淨む、一に

は佛法僧を信じ、二には深く因果を信じ、三には心を解せよ。」

と説かれて居る、即ちこの三つの事に依つて我が敎の道德は成立つといふのである。その第三に心を解せよとあるやうに、人間の心は不滅なものであるといふことをハッキリ意識しなければならぬ。自己發見だとか、自我實現だとかいふやうな事を近來言ふけれども、その自我が滅びるものやら、滅びぬものやらわからぬやうでは、眞に自我を發見したとは言はれない、自我に就いて一番の問題は生命の問題である、さうしてその生命の内容を吟味することである、世間一般には自我とか自己とかいふことは、加減に使つて居る、佛敎のみ正しい意味に於てこれを研究したと言つて宜しいのである。さうしてその不滅の生命が、因果應報の大規律に依つて運轉されるといふことを教へた、即ち善因善果、惡因惡果といつて、善惡の行爲は一時で滅びるものではない、

現在だけで勳定を附けるのではない、何處までも因果の法則は變らぬものであるから、此の世に於て不幸な境遇に置かれたやうでも、爲したる善は必ず後に報ひて来る、此の世に於て悪い事をしてその結果を感ぜずに、悪い事をしながら幸福に酔うて死んだら得であるかといふとさうはいかぬ、その悪い事は必ずや後にその結果を感じなければならぬといふ、因果應報の理を、嚴密なる意味を以て教へた。その因果應報の大規律の根柢から佛敎徒の道德行爲は規範されて行くものである。

その上に各自の心の内には佛性の存することを信するのである。心をだん／＼解して行く、不滅の内容に非常な立派な佛の性があつて、それは佛敎に於て説くところの「仁義禮智、心に根す」といふところではない、モウ全く佛様と同じ大きな智慧もあり、慈悲もあり、力用もあり、完全無缺なものを有つて居る、而してそれが唯具へられて居るといふた

けではない、顯動性といつて生きてムク／＼動いて顯はれなければ承知をしないのである、そこに道德が人間の行爲に現はれて來るのである。人間の行爲の善といふものは、佛性顯動のその一部々々が顔を出すのであるといふ風に、非常な深い所に道德の根柢を立て、居るのである。

その他宇宙を眺める場合にも、佛敎に於ても天道と言つたり、いろ／＼宇宙法から導いて居るが、佛敎はこの宇宙には圓慈といふことを説くのである。佛敎でも中庸あたりには「一朶々たる其の仁、淵々たる其の潤、浩浩たる其の天」といつて、人間の仁の道德といふものは、この廣い天の相に基くものである、淵が深く水を湛へて居るそこにやはり親切が漲つて居つてその中から現はれて來るものであると説いて居るが、佛敎はそれをモウ一つ完全に哲學的に説明したものである。この大宇宙を十分に研究して見ると、到る處にその偉大なる親切といふものが一



バイ満ちて居るのである、それが形に現はれて居るのは萬物の生成化育して行く有機であつて、草も木もみな生成つて花も咲き鳥も啼つて居る、それが縦し一時どういふ悲惨なやうな事があるにしてもそれは一時の變態であつて、大宇宙の本則は温かなる慈悲の漲つて居るものである。その圓滿といふ圓滿完全なる親切、紫の雲のやうな温かな状態のものが天地宇宙に遍満して居るといふことを説いて、それが今度人格化したときに本佛となつて現はれて来る。如何なる場合にもその尊き佛様が慈悲の心を以て吾等を導いて居られるといふことを信する、その温かなる觀念が道德を生んで来るのである。

人間を道德的に導くには、親切なものに觸れさして見るのが一番はよい、その場合に親切にされて癪にさはるといふやうなことであつたら、人間といふ者は決して道德性にはならぬものである。仰いで天を見ても、麗かなる天を見て「あゝこれは有難い」

必ず根性が擱けて悪化してしまふ。西洋ではいろいろの社會事業が發達をして居るから、棄兒などを拾ひ集めて立派に世話をする所があつて、そこには教員も居れば看護婦も居る、至れり盡せりの状態で大規模の育兒所を拵へたけれども、結局それは失敗に終つて子供は皆不良性になつてしまつた。そこで近來は方針を變へて、少數の子供を家庭の優しい人のあつて居る所に託して育て、貰ふことにした、さうすることの結果は、粗末な裏長屋の、夏になれば腰巻一枚で暮して居るやうな生活をして居る所でも、そこで育てられた方が、完全なる大組織の育兒所で醫者も居り保母も居つて一々行儀や衛生を教へて居る子供よりも、却つて人間が善良になるといふ事が經驗されて居る。それは何故であるかといへば、さういふ裏長屋の母親といふやうな者は、時には子供を大きな聲で叱りつけたりするけれども、併し根本に於て子供に對する親切、優し味を有つて居る、育兒所の方

といふ感じを持たなければならぬ、天を見ては腹を立てるやうな人間も近來は出来て居る、さういふ者は必ず破壊的な兇暴な性質を現はして居るのである。今の社會主義などの根本を成して居るクロボトキンあたりの思想といふものは、天地を眺めて非常に怨みを言ふのである、少しも天に對して感謝するといふやうな事は考へない、「己れツツの奴がツツ」といふ風に出て来る、その擧句には社會國家を呪つて、爆裂彈を投げつけるやうな思想になるのである。宇宙を眺めて「あゝ天地は如何にも廣大な温かいものである」と考へ、眼には見えぬけれどもそこに本佛在せりと考へたときには、その人の徳性といふものは必ず開發されて行くのである。人間の性質が善くなるといふことは、家庭に於ても親切な親があつて育てられるから善良になるのである、これが性の悪い他人の所に貰はれて行つたといふやうなことで、始終虐められてばかり居つたら、その子供は

は立派な教員であり保母であるけれども、それは本當に子供に對する親切といふものが裏長屋の母親に及ばない、だからどれ程設備が完備して居つても子供は善良にならぬといふことになるのである。斯様に親切の心が人間を善化せしめるといふことは頗る明瞭な事である。

所が佛教はさういふ事を考へたか考へないか知らんが、人を善くするのは慈悲に如くものはない、一切衆生を濟ふの力は慈悲であるとしてその事を説かれたのである。佛性のことは法華經の方便品に、圓慈觀のことは、大涅槃經に、本佛のことは法華經の壽量品に説かれた、さうして信仰と道德の關係は切つても切れない關係に居るものであつて、往いて一つのものである。それは今の優婆塞戒經にあつた通り、一には佛法僧を信すといふ三寶歸依の信仰と、二には深く因果を信すといふ因果の規律と、三には心を解するといふ心の不滅の生命、實在觀念、佛性



を有してそれが顯はれ出るといふ本具の美點を考へて、そこに佛教の道德といふものは成立つものである。それは法華經の開經たる無量義經の十功德品などに非常に詳しく説かれて、道德上の事柄はモウ殘らず説明されて居る。唯だ斷片的の事を言ふとか、信心の附録にチヨット道德の話をするとか、そんなものではない、頭から尻尾まで抑々佛教といふものは道德善根の事を説かぬ所はないのである。この位澤山説いてあるものを、佛教は道德の事を言はないなどと儒者は言つて居る、それは何にも佛教を知らない者の言ひ草である。素人は松茸山に入つても松茸を一本もヨウ取らん、松茸がある／＼と言ふから行つて見たらチツともありはしなと言ふ、併し松茸取を商賣にして居る者は同じ山に入つて何十貫でも取つて来るやうなもので、儒者が佛教を見て、佛教に道德が無いなど言ふのは、佛教の親方を知らぬからである。彼等が無學のために何にもわからぬ

と言つて宜いのである。それは論語や大學を見て居つただけの知識で佛教を見ようと思つても、佛教の方はモウと大きいし、且つ深いものであるから、その眞價がわからないのである。

#### 四、佛教道德の徳目

次に佛教道德の徳目といふことであるが、佛教には非常に完全な徳目が説かれて居る。即ち第一には四無量心といつて、先づ四つの事に無量の徳があるといふことを説くのである。その四つとは「慈、悲、喜、捨」を言ふので、「慈」とは積極的に優しい事をするのを言ふ、即ち人々に幸福を得せしむるはたらきを指すのである。「悲」といふ方は少し消極的なのであつて、優しい考へではあるけれども力が幾分か弱いのである、それは人々の目前の苦みを除いてやることを言ふ、だからこれを母親のことに譬へて居る、それから慈の方を父親に比して、慈父、悲

母と言つて居るが、ザツとそんなやうな意味である。併し強ちこれは別けなくとも、積極と消極、裏と表といふものは相俟つて行くものであるから、「慈悲」と二つ纏めて使ふ場合が多いのである、慈悲といへば親切の至れり盡せるものといふことになる、大きくも小さくも、裏も表も、高い所も低い所も、何もかも心配をする、父の如く母の如くその兩方が相談してやつて行くといふ風な意味である。

それから「喜」といふのは、人の幸福をよろこぶ、儒教で言へば即ち後樂であつて、人の樂しむを見て而して自分がそれを樂みとするのである、佛教では隨喜と申して、人の善い事を自分の善い事のやうに思つて行くのである、日本で言へば仁徳天皇が、「民のかまどはにぎはひにけり」と詠はれ、「民の富めるは朕が富めるなり」と仰しやる、あのよろこび方が喜といふことである。或は忠臣が主人の爲に犠牲になつても、大君の心を安んじ奉ればそれを喜ぶ、

楠公が初めに北條氏を滅ぼした時には非常な苦戰をしたけれども、これで聖運を啓いたと言つて非常に喜んだ、あれらが喜といふ意味になる。これは嫉妬心とか排擠心の裏を言ふのであつて、人間は注意しないと嫉妬排擠の心が起るものである、嫉妬なんといふことは女ばかりがやるやうに思つて居るけれども、なか／＼さうでない、女のは小さい、先づ夫婦の間ぐらゐのことで、モウ少し廣い所まで行くかも知らんけれども大したことはない。男の嫉妬といふものはなか／＼激しい、政治家などでも始終嫉妬で喧嘩ばかりして居る、政黨の離合集散でもそれが多い、誰を總裁にするとか、誰が總務になるとか、ふやうな役割の關係が難かしい、自分が役員の中から刎ねられたといふやうな事のために、直ぐ反對黨に走つたりして居る、或は大員にして呉れなかつた、今度は出られると思つたのに俺を除外したといふやうな事で直ぐ喧嘩をする。それは軍人の社會で



も近來はその通りである。それが又國內どころでは  
ない、世界的に嫉妬をやき合つて、亞米利加などは  
日本が支那の方でチヨットうまさうな事があると直  
ぐ大嫉妬をやくといふやうな譯で、いろ／＼面倒な  
事が起る、みな嫉妬の喧嘩である。これが若し他の  
榮えを以て自分の喜びとするといふ道徳を以てした  
ならば、世の中にはよほど美しい關係が現はれて來  
る。それを釋尊は高調されたのである。嫉妬をやめ  
て他の幸福を以て自分の喜びとする、これは親子の  
間などには行はれるのである、親は自分がだん／＼  
年を老つて行き居つても、息子が成人して盛に働く  
やうになれば、「あゝ子供が大きくなつた」と言つ  
て、自分の腰の曲つたことを忘れて喜んで居る、自  
分はその子供のために働いて早く年を老つたのであ  
るけれども、「彼奴があんなに働くやうになる爲に  
俺はこんなに腰が曲つた」と言つて怒る親はありは  
しない、「まあ／＼宜かつた、俺は年を老つたから、

お前が確かりやつて呉れ」と言ふのである。夫婦の  
間でもその通りで、良い女房になれば、亭主が喜ん  
で好きな物を食べて居るのを見て自分も満足する、  
随分それを拵へるには手数がかる、とろろ汁なら  
とろろ汁を拵へるには、山の芋を買つて来てそれを  
拵つて、それから出汁を拵へて……なかく／＼厄介な  
拵だけれども、良人がとろろが好きで、「今日は格  
別うまいナ」と言つて食べて呉れば、それに依つ  
てその勢を忘れて喜ぶといふ、それが隨喜の喜の字  
である。それをやらなければいけないと言つて釋尊  
は勧めたものである。

どは、いつかあの人が性の悪い事を言つた、斯うい  
ふ時に斯う言つたといつて、悪い事だけはなかく／＼  
能く覚えて居る、モウ忘れても宜からうと思ふ時分  
にまた言ひ出して、それで喧嘩をしたりして又新し  
い生命を附與するやうな事をやつて居る。それはい  
かんと釋尊は言はれるのである。それから嬉しい事  
でもその嬉しいといふ事の爲めに、身を過つたこと  
がある、どうもそれが忘れられないといふので、男  
女の愛欲などでも「どうも彼處で一パイ御馳走にな  
つた、あの時ニョツと笑つた顔が忘れられない」と  
いふやうな事のために、だん／＼と變な氣持になつ  
て來る、それを切り捨てろと言ふのであつて、難か  
しい事ではあるけれどもそれを修養して行かなけれ  
ばいかん。怨みのやうな事でも、「どうも彼奴は憎  
らしい、捨て、置けない」といふやうな氣分を起す  
けれども、さういふ詰らない事柄は切り捨て、行か  
なければならぬ。善い事は一心にこれを保持し、詰

らない事は早く思ひ切つてきり捨て、行く、その捨  
といふことが一つの道徳である。  
この四つの事には様々なる徳があるからして、こ  
れが原則となつてあらゆる善が行はれる、無量の徳  
があるといふので、これを四無量心といふ。これは  
モウ阿含經から大涅槃經に至るまで何處にでも出て  
居る、小乘も大乘も無い、佛教は道徳の原則として  
慈、悲、喜、捨の四つの心を説くものぢやといふこ  
とになつて居る。よく羅漢には親切が無いなど言  
ふけれども、佛教に來つた者に親切が無いなどとい  
ふ事のあるべきものではない。佛教でなくとも人間  
といふものは親切を以て尊しとするのである、儒教  
に於ても「仁は人なり」と言ふ位で、親切といふこ  
とが人間の生命である、それを能く説き切つたのが  
佛教である。

モウ一つの「捨」といふのは、きり捨てることを  
言ふのであつて、つまらぬ事に心が引掛つていつ迄  
もグズ／＼して居つてはいかんといふ事である。心  
配な事でも、それに心が引掛つてしまつて、何處で  
もそれを思ひ出しては、「あの事を考へると氣色が  
悪いと言ひながら又その事考へる、殊に女の人な

それから一方には四恩の道徳といふものを説かれ  
る、恩を知り、恩に報いるといふことは道徳の原則



である、御恩を受けてはそれを忘れてはいけない、さうしてその御恩に報いなければならぬ。心地観經にはそれを詳しく説かれて、

「一には父母の恩、二には衆生の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩なり。」

といふ四恩を擧げてある、これが又非常に良い事である。恩を受けて恩を忘れぬやうにするといふことで社會を構成して行くならば、そこに立派な世の中が出来、**「世間安立す」**と説かれて、釋尊はこれに依つて人間の社會が構成されると言はれるのである。報恩の觀念が無くなつてしまへば人間の社會は破壊に瀕するものである、恩を受けても有難いと思はぬやうになつてしまへば人生は壊れてしまふ。尙ほ四恩のことは後にいふ少しく話して見たいと思ふが、これは徳目として非常によく整うて居るので、家庭、社會、國家、宇宙の四方面の道德が整頓して説かれて居るのである。

信心とは違ふ……といふやうな、瘠せ衰へたやうなものをして以て道德だと言はなければならぬことはない。モット豊富なる、包括的なるものを道德として考へれば宜しいのである。

そこでこれ等の徳目を實際の行爲の上に現はした。實例として、之を日蓮聖人の上に就て見ると、聖人の一代の行動はチャント佛教の道德が皆行はれて居るのである。日蓮聖人は唯だ熱烈な信心だけ教へた人ぢや……と思はれて居るけれども、さうではない、信心は圓滿珠の如き信を有つて居つたけれども、又念根に於ては絲の華を貫くが如くに過去の善と將來の善とを合せて、益々その人格が圓滿に發達して居る、さうして精神の統一を得て一心不亂に事に當るどころ、精進の行を積んで倍々屈せず進んで行くところ、智慧に依つて是非正邪の判断をして行くところ、皆この五根といふものを完備して居る。日蓮聖人は唯だ信仰の人だ、ドンドコ太鼓を叩いて熱ばか

それから更に五根といふことを説かれる、これは前に申した善根と言ふも同じであつて、信根、念根、定根、精進根、慧根といふ五つを五根といふのである。信根といふのは即ち信心であつて、前に引いた那先經に誠信は水を清むる珠の如しとあつた、あれである。念根は善を念すること絲の華を貫くが如しで、舊い善も新しい善も共に保持して行くことである、一つ拾うては一つ落とすといふのでは何にもならぬから、今までの善きものを保持しつゝ、新たな善きものを加へて積み重ねて、積功累徳するといふことが即ち念根である。定根といふのは所謂精神の統一であつて、滴の石を穿つが如く、精進は援兵を送るが如く、慧根は門を衝る人の如く惡しきものを入れないといふことで、この五根を以て善根と稱して居るのである。佛教では道德といふ言葉の中に、信心もあれば智慧もあれば皆ある、道德といふのは唯だ善い事で、それは智慧とは違ふ、それは宗教の

りあつた……と言ふのは、それは見方が粗末だからナウ見える、チャント五根を立派に具へられた人である。四恩といふ方から言つても、佛の恩も無論大事に思つて居られた、國王の恩に就ては勤王の大義を唱へて北條の惡逆を痛撃された、衆生の恩に就ては慈悲を以て衆生に對し、衆生濟度の事に當られた、父母の恩に就ても非常に孝養心の強い人であり、又自分の弟子信者にも孝心を奨められて居るのであつて、「四恩鈔」といふ文章も書かれて居る位に、四恩並び行はれた人である。又四無量心に就て考へても、慈悲の人であり、人の榮えるのを喜び、つまらぬ事はきつて捨てるといふこの四つを立派に有たれて居る。日蓮聖人の一代の行動に就て、少しく觀察を分類して能く考へれば、實に完全なる人であるといふことがわかる。唯だ日蓮は強かつた、豪傑坊主だつた……そんな事は素人の粗雑な頭腦から出る批評であつて、佛教の道德の徳目に合せ



て観るとき、それに適合した完全なる人格者であるといふことを理解しなければならぬ。それが解れた、やはり自分の修養もさういふ風に日蓮聖人を手本にして行かうといふことになる譯である。

### 五、佛敎道徳の特色

次に佛敎道徳の特色といふことを纏めて話して置きたい、これは今までの話と多少重複する點もあるけれども、佛敎道徳の特に勝れて居る點を明瞭にする意味に於て、茲に四つほどのものを算へて見たのである。

#### (イ) 根底の深き點

その一つは根底の深き點であつて、これは前に佛敎道徳の根底といふ所で述べた如く、生命の實在に基き、因果の規律に基き、佛性の顯動に基いて、さうして圓慈の宇宙觀に基き、本佛の慈悲に感孚して起る、さういふやうな非常な深い哲學的なる、宗教

思議なほど大事な點が一致して居る、これが暗合であるとするれば、實に達人の大觀したること驚くべきものだと思ふ。  
さういふ風に佛敎は儒敎、神道、その他東洋思想の全體、又西洋の思想に於ても決してこれを敵視するものではない、それ等の思想を包容して、彼等の蕩擻して未だ明かにし得なかつた所を明かにし、痒い所に手の届くやうに説明した、彼等も搔きたいと思つて居るけれども手が届かない、佛敎に依ればチャントその痒い所に手が届くのである、搔きたくないといふのではない、搔きたいと思つて居るが手が届かない、それを佛敎はチャント搔けるやうに教へたものである。それを嫌がるといふのはどうかして居る、春中が痒い、手を廻しても届かぬといふ所を搔いてやつたからと言つて腹を立てる奴は無い筈である。佛敎の教ふる所は、彼等の達せんとして未だ達し得ないで蕩擻して居るところのものに明確なる

的なる觀念に依つてその根底が築かれて居る、さうしてそれがその儘道徳を發生し得る完全な意味になつて居る、儒敎の道徳も無論立派なものであるし、自分は十分の敬意を表して居る、聖賢の學は結構なものであつて、少しもこれを侮辱する考はない、唯だ佛敎を呪ふ儒者が間違つて居ると思ふのである。聖賢の教と佛敎とはその範疇がスツカリ似て居る、大なる東洋思想の上に於て全然一致して居るのであつて、その間に予盾は無いのである。我が國の神ながらの教も無論佛敎、儒敎と一致するものである、これを一致しない別物であると思ふのが間違つて居る。東洋の思想といふものは皆な一致するやうに出來て居る、根本へ戻せば所謂一元的のものであつて、一つの大なる思想の流れがそこにあるのである。それは聖德太子の言はれて居るやうに「此の三法は天極の自有にして人造の私則にあらず」人間が私に拵へたものではないと言ひ得るのである。不

解決と指導を與へたものである。

#### (ロ) 思想の整へる點

次に思想の整へる點に特色を見るときいふのは、これも前に申した通りに信仰を基點として一切の善を教へた、優婆塞成經には

「三歸依は乃ち是れ一切無量の善法乃至阿耨多羅三藐三菩提の根本なり。」

と説かれて、一つの信心は一切善根の根本であることを明かにして居る。又心地觀經には前に述べた如くに、信は佛法に入る根本であると説いてある、斯様に、信を以て一切の善法を増長するといふことは、佛敎の通則である。さうしてそれが非常に立派な事なのである、その大きな信念から導いて、信念が一轉すれば法悦の心となつて、その悦びの満足の方から善を行はすといふことが、思想の本當に整うて居る點である。信心の満足の心が法悦となり、法悦の心が慈悲となり、慈悲の心が善を行ふといふ風



にして、その基點及び道德の發生順序といふものが、到底他の道德では及びも附かぬほど能く整うて居る。

而してその行ふところは四恩並び行はれることを説くのであつて、家庭に於ては父母の恩、社會に於ては相互の恩、國家に於ては國王の恩、天地に於ては三寶の恩を説くのである、即ち「四恩並び行はれて悖らす」その點が非常に宜しい、これは日本の儒教などをやる人はよく心得なければならぬ。心地親經にこの四恩の事を説かれるときには、多くの長者達が寄つて、佛教は「父母を遠離して出家に趣く」親を捨て、出家するのだから親不孝ものである、恩を知らないものであると言つて非難したのでに對して、佛がそれは違ふ、佛教は恩のある所をよく調べ、世間の恩も出世間の恩も整頓したものである、それ故に四恩を教へたものである。家庭には父母の恩、社會には衆生の恩、國家には國王の恩、天地に

は三寶の恩を説いて「是の如き四恩は一切衆生平等に荷負す」すべての人間は皆この四恩を荷うて居るものである、君の恩、親の恩ばかりではない、社會の恩、天地の恩といふものを忘れてはいかんと説くのが佛教である。佛教が恩を知らないのではない、父母を捨てるのではない、父母の恩は第一に數へて居るけれども、社會の恩、天地の恩を忘れてはいかんと言ふのである、日本の道德論でもさうである、佛教が道德を知らんのではない、世間が單に家庭の道德、國家の道德を語つて、社會の道德、天地の道德に力の入らない所が佛教と違ふのである、佛教の方は四恩を並説して行くのである。だから世間の方が思想が不足して居つて、佛教の方が思想が整うて居るのである、缺けた方が整うた方を笑ふのは、猿が鼻が低いからといつて人間の鼻の高いのを笑つたのと同じことである、どうも自分はそんな氣がしてならない。吾輩が斯う言ふと「あなたがそんな事を

言ふのは損です、惡口だけは抜きななさつたら……」と言ふ人が澤山ある、けれどもこれはナニも惡口ではない、サウ言はぬと物がハツキリしないのである。どうして儒者達が佛教の惡口を言うたのか、自分は不思議に堪へない。

又國家のことを説くにしても、佛教は實によく整頓して居るのである。守護國界主經の中には「國王を守護す」といふ言葉で説かれてあるが、つまり國王に對する忠義の事である。多くの場合に佛は平等の慈悲を説き、貧窮孤惻といつて感れむべき者に對する社會道德的のことを話されるのに、今日は國王ばかりを守護せよと説かれるのはどういふ譯でありませうかと御尋ねした時に、佛はこれに答へて、

『平等に由るが故に國王を守護す』。  
大勢の者を可哀さうだと思ふから國王を守護せよといふのである、國王だけを守護するのではない、國王の力、國民を保護し得るのである。澤山の子供の

ある母親が病氣に罹つてしまへば子供が皆困るから、母を達者にして母に御馳走を食べさせ、藥を服ませて、母の力に依つて子供を養育するが如きものである、即ち

「一切を哀愍むが故に國王を守護す」。  
と言はれて居る、この思想が今の社會主義者や人道主義者にはわからないのである。今は學者でも宗教家でも、國家主義なんと言へば何だか肩身が狭いやうに思つて、人道主義、博愛主義、永遠の平和といふやうなことを言つて、さうして日本の國民道德を嘲つたり、或は共產主義に走つて貧乏人の味方をして、我國の君主制度を破壊するなどと言つて騒いで居るが、守護經を良く研究すればその愚かさ加減がわかる譯である。

さうして國王を守護することに依つて七つの事が護られると説かれて居る。それは國王を守護すればその國の太子が護られ、大臣が護られ、百姓が護ら



れ、随つて庫藏——經濟が護られ、經濟の結果は四兵といふ軍隊が護られ、軍隊の力は遂に隣國を守護するに至るのである、この四兵を護れば隣國を守護するといふことは最も大きな觀念である、國家の力を十分に持たなければ世界の平和に貢献することが出来ない、人道平和のために國力の發展を圖らなければならぬといふことを説かれて居るのである。佐藤中將などが熱心に唱へられるのはそれである、日本の國が世界の正義を擁護するために、世界の平和に貢献するために、先づ日本の國力を強くして置かなければならないと言はれる、その意味は私にもよく解るし、私は大いに共鳴して居る。だから或る一派の人々から見れば、私は坊さんでありながら非常に武力主義の人間のやうに見られる、あれは法華坊主だから戦の事が好きだ……」などと云ふ、さうではない、彼等の頭腦が専ら生煮でわからぬのである。永遠の平和といへば國家主義と衝突するやうに

考へて居る、決してさうではない、釋尊の教といふものはモット整うて、頭腦が圓滿にはたらくやうに出来て居る。國王を守護するのは、國內に於ては貧窮孤獨の者を恐れむ所以である、若し池に龍が棲んで居らなかつたならば、早魃に依つてスゲ水が涸れるとか、雨が降れば堤防が壊れてしまふ、さうすれば池の中の魚は皆死んでしまふではないか。魚に餌をやつたり魚を養つたりする事だけが魚を可愛がることで、堤防を修築したり、その中の龍が大事だといふやうなことは、鮒や鯉には關係が無いと思つて居るのは大間違である、鮒などは食はないでも死にはしない、堤防が潰れて水が無くなるとか、或は早魃が續いて池の水が涸れてしまへば、鮒も鯉もない、龍も魚も、水族ごとく死滅してしまふ。その如くに國王を擁護せず、國家の威徳が衰へるとき、國內の人民はその幸福を喪ふものである。故に國王を守護し、國家を大切にせよと説くのである、

國家を大事にすることは國內の人民を恐れむ所以である。

その位の事が聞いただけで解らんならば、一べんやつて見たら宜い、大きな池を壊すのは面倒だから、小さな泉水でも宜し、鹽でもかまはない、金魚や鮒を入れて置いて鮒をやつて、さうして鮒を食ひ居る所をバツと鹽をひつくりかへしたならば、金魚はどうなるかといふ事がわかるだらう。さうしたならば、歳暮に五十銭の餅を買つた爲に「日本の國家をブースに献す」など言つて、日本の天子様は餅を下さらんけれども救世軍は餅を下さる、あゝ救世軍様……といふやうな馬鹿な事は出来ないだらう。

水が無くなつたら金魚は鮒を喰へた儘バツ／＼する位のことは、幼稚園の子供でも知つて居る。人間も馬鹿な事だ驅されるものぢや。日本の國家は何處までも皇室を中心として此の國家を擁護し、その國の力、内には國內の人民を保全し、外に正義を擁護し

て永遠の平和を將來せんとする、此の建國の理想は儼然凛乎として輝いて居る。この建國の理想は少しい位の事情に依つて變るべき筋合のものではない、年々歳々吉野の山に櫻の花の咲く限り、日々東海より旭日の輝く限り、日本の國是、日本の理想は變るものではない。これを佛敎の教化として十分に國民に打込んで置けば、凛然として千古に輝くのである、それが實に佛敎の思想の整へる點である。

そこに轉輪聖王の理想を尙ほ附加して考へたならば、今日は王様といふことをあまりに軽く考へ過ぎて居るから、共產主義のやうな議論が澤山出て來るのであるけれども、轉輪聖王あつて初めて理想の國家が成立ち、又眞の人道平和が成立つのである。世界を今の所謂民衆に委せて置いて決して眞の平和は來るものではない、民衆は必ず衝突をする、同じ無産者の中でもいろいろの黨派が出来て、左傾だの右傾だのといつてスゲ喧嘩をする、今日の無産黨なん



といふものは、共同の敵を控へながらあの位喧嘩をして居るのだから、彼等が敵が無くなつて大なる勞力を得たならば、どの位激しい喧嘩をするかわからない。露西亞などでも非常な喧嘩をするのだけれども、今は共產黨の政府といふものが銃剣で威嚇して居るから、辛うじて喧嘩が治まつて居る、あの彈屋といふものを除つたならば、國內の到る處に喧嘩が起つてそれこそ修羅の巷(まち)が出現するのである。それは何故かといつたならば、彼等を統制するものが無いからである、皆が平等の權利であつて、誰が命令を發するといふ者も無い譯であるから、所謂烏合の衆といふのはそれである、統率者が無い。人間は統率力を十分に強めて置いてもなかくうまく治まらぬのに、統率をまるで無くしてしまはうといふのであるから、それは一つの運動會でもやればしない、「集まれッ」と言つても「ナニを言ひ居るか」といふので集まらない、「こつちへ來い」と言つても「俺

は小便がしたい」……「俺は腹がへつた」……とてもうまく行くものではない。そんな馬鹿な事で人間の世の中が治まつて行くと思へるのは、實に愚の骨頂と言はなければならぬ。 どうしても人類の文明といふものは理想の國家を以て、その國と國との國際關係を正義に導いて行かなければならぬ。その理想の國家といふものは、デモクラシー式に行くべきか、轉輪聖王を戴いて行くべきかといふことが、今日人類の上に殘されて居る問題である。その場合に、亞米利加の大統領よりも日本の皇室の方が理想的であり、最後の正義を擁護せられるものだといふことになれば宜いのである。 お經の方ではその通り、轉輪聖王でなければならぬといふことになつて居る。印度にも當時大統領の國家といふものがなかつた譯ではない、毘耶離といふ國は、今日の所謂民主國で、選挙に依る大統領に依つて治めて居つた國である、そこに居つたのが彼

の維摩といふ居士で、少し拗くれたやうな親爺だけれども、お釋迦様には大變歸依をして居つた。その毘耶離の國は決して理想の國家でないとお釋迦様は仰しやるのであつて、國は何處までも轉輪聖王といふ王様に依つて導かれて行かなければならぬ、その事は法華部の大薩達經の中に詳しく説かれ、その他涅槃經にも阿含經にも、一切經の到る處に轉輪聖王の事は説かれて居る。又過去の歴史に擬へて、昔斯ういふ轉輪聖王が出て斯ういふ治蹟をなさつたといふ風に、過去に理想の王が出たといふ話も、幾千百箇所に説いてあるかわからない位である。それは皆採つて以て帝王學の模範となるべきものである。 その中心の思想は、正義と威力と、さうして教を尊び、道を尊んで行くのである。ちようど日本の御皇室のなさつて居る事がそれに當つて居る、「祖宗の國を經するや教化を以て先と爲す」と今上陛下も仰せられた、即ち教化を重んぜらると共に、これに

伴ふに正義と威力を以てせられたのである。神武天皇といふ御名前の如きは、轉輪聖王の意味合をよく現はして居る、一面は神聖にして神様である、一面には威力を有つて武を兼ねて居られる、神武天皇といふ御名前の如きは、轉輪聖王の翻譯の言葉と見ても宜い位のものである。たゞ正しいばかりでは駄目である、儒教でも正しいばかりで力が無いと段々倒されてしまふ、孔子や孟子の教は議論は正しいけれども力が無いものであるから、そこで管仲晏子の學に張り倒されてしまつた譯である。佛教も下手をやるとやはりさうなる、坊主でも唯だ優しいばかりで頼へて居ると、コツンとやられて「勘辨へて呉れ」と泣き出さなければならぬ。日蓮聖人はそれが嫌ひであつた、だから日蓮聖人は常に珠數丸の銘刀を携へて佛教を宣傳したのである、それはナニも人を斬るつもりではない、強盜をはたらくつもりではないけれども、そこに正義の威力を示して法華經を宣傳



せられた、やはり轉輪聖王の理想から出て居る。日本の天子様は非常に優しいお方であるけれども、高御座には二つの劍がチャンと着いて居る、武を尙ばれることは確かである、だから大事の御儀式といつたならば、日本の兵隊が皆劍を着けて塔列する、それに旭日の光が映つてキラ／＼と光る、これを稜威の光と言ふのである。その稜威はナニも人を刺す劍ではないけれども、併し正義に反する者あれば腐徳の劍となる、この威力を兼ねて初めて日本の國があるのである。平和主義といつたならばデキに軍人を罵つて、軍閥だとか帝國主義だとか、資本家の提灯持ちだとか言ふのは實に間違つたことである、サウ言ふお前は何の提灯持ちだ、第三インタナショナルの提灯持ちか、國を壊す奴の提灯持ちかと言はなければならぬ。同じ國民であつて、命を捨て、君國に盡す軍人といふものは、一兵卒と雖も實に神聖なるものである、社會の他の方面は腐つても日本の軍隊

は神聖である、一朝事有つたならば生命を惜まぬ者が幾百万人でも居る。此の神聖なる、命を捨て、國家を擁護する者を軽々しく侮辱するなどといふことは、非常な悪いことである。無學の徒が多いからそんな事を言ふのである、之に相槌を打つて宗教家が御機嫌取りのつもりで、政治家などが軍閥を悪く言ふたり、帝國主義を呪うたりする、如何にも世界は平和主義である、人道主義である、博愛主義である、などと云つて、讀めて貰はうと思つて調子に乗つて言ふけれども、私は彼等の無學と無定見とに呆れて居るのである。基督教の坊さんなどには、よく人道主義や、萬國主義やと言ふ者がある、佛教も世界主義であつたけれども、日本へ来て國民的宗教になつたのは墮落ちや……などと云ふ、何も知らないで言ふのである。だから私は始終言つてやる、「君は一體佛教をやつたのか、やつて居はすまい、そんな事を言ふのは佛教に對する無智を表白するも

のである、轉輪聖王の理想も知らないで佛教を批評する資格があるか」と言つてやる、それ一つで澤山だ。佛教は轉輪聖王の御理想を釋迦如來がお説きになつたものである、それが日本の國體と全然暗合一致して居る點に於て如何にも尊い事である、佛教に示されて居る轉輪聖王の理想は、現實の日本の皇室に於てこれを見ることが出来るのである。

宜い譯ちや。その時には吾輩が辯論に立つて必ず佛教の勝利にして見せる。佛教くらの思想の整うたる、勝れた教は無い、而かもその隆盛なる時分に於てまだ、發揮されない點が澤山あつたのである、これをヨリ良く發揮しなければならぬのに、反對に叩き込んでしまつたといふことは、恰も藏をあげてだん／＼實を出して來なければならぬのを、その藏に火をつけて焼かうといふやうな譯だから、實に悪い事である、速かにその失態より覺醒のなければならぬ。

(ハ) 實行力に富む點

だからその點から言へば儒教などよりは佛教の方が日本の國體に一致し、國民道徳に一致するものである。儒教のみが日本の道徳を擁護して、佛教は人倫綱常を破却するものであるなんといふことを言はれて、その儘になつて居るからいけないのである。若しこれが裁判で判決の附くものならば、彼等儒者輩を皆被告として訴へて、彼等は日本の文化の上に不都合なる失態を成したるものなりといふ事に判決をして貰はなければならぬ、佛教の名譽を毀損したる事莫大である、損害賠償の五十億圓位請求しても

次には實行力に富むといふ點である、これが亦佛教の道徳の一つの大きな特色である。信仰なき道徳はその實行に力が無い、優婆塞戒經には世間の信仰なき道徳のことを、彩色に膠なきが如しと言つてある、花鳥、山水或は人物、どんな美しい繪が描かれ



て居つても、その輪の具に膠が入つて居ないものであるから、直ぐに剝落して消えてしまふが如きものである、世間の道徳といふものは信仰を基礎にせざるが故に力が無い。即ち優婆塞戒經には

『若し三寶に依らずして戒を受くれば之を世戒と名く、是の戒の堅からざることは彩色に膠なきが如し、是の故に我れ先づ三寶に歸依して然して後に戒を受く』。

と説かれて、信仰から道徳といふ關係を教へられた、これが非常な大事なことである。

そこで佛敎の道徳はこれを白羯磨と申して居る、白羯磨といふのは自から誓を立てることである、佛敎で善い事をしようといふ時分には、たゞ勝手にするのではない、自分の信する三寶様に對して誓を立てる、今までは嘘を吐きましたけれども是からはモウ嘘は言はぬやうにしますとか、今までは癡癡をおこしてスグ女房の頭を殴りましたけれども、是から

かん、世界の人類が皆さうである、どんな野蠻な、南洋に素裸で暮して居るやうな土人でも、彼等の信する神の前に誓つたといふことになればそれは破らぬといふ一つの美點が人間にはある。  
斯様に先づ自分の信する所の佛様に對して誓を立て、それから行くところの道徳であるが故に、それを破ることは容易に出来ない。のみならずその信する佛様、神様といふものは、始終自分を見て居られるのである、人は見て居ないでも神や佛は見透しである、例へば泥棒をしませんといふ誓を立てる、道を歩いて居ると墓口が落ちて居る、前後を見て誰も居らぬといふので、その墓口を拾つたとする、誰も見て居ないやうでも、佛様なり神様はチヤンと見て居られる「イ、エ拾ひません」と言ふ譯にはいかん、人は欺くべきも神や佛は欺くべからずといふことがあるから、それで人間は道徳が守れて行くのである。又さうすることに依つて特別に可愛

は殴らぬやうに致します、あまり癡癡が鎮まらんければ裏へ出て自分の頭をどついても女房の頭は殴らぬやうに致します、或は手に珠數をかけて居る限りは人の頭は殴りませんとかいふ風に、誓といふものを立てるのである。宗敎に入ると必ずさうなる、又それが誓へない間は嘘なんである、又誓つても屢々破る人もあるけれども、さういふのはまだ信心が嘘なんである、私の知つて居る人で、いろ／＼の誓を立て、文章に書いて讀んだりしては、又それを破つて平氣で居る人があつたけれども、私は氣持が悪くて仕方がなかつた、「ヨク君はさういふ事をやれるナ、僕にはやれない」と言つたことがある。自分が守れないと思つたら誓を立てないで横を向いて居る方が宜い、佛様の前に行つて斯様に致しますと誓を立て、その裏からそれに背くやうな事を平氣でやるなんといふのは、特別の人間である。先づ佛様の前に誓を立てたならば、チョットそれは破る譯に行

がつて貰へるといふ、所謂佛様の御守護といふことを信するが故に、佛敎の道徳は守り易く、實行力に富んで來る譯である。

優婆塞戒經の「世戒の堅からざること彩色に膠なきが如し」といふ一言は、實に名句である。いろ／＼さういふ風な意味合はお經の上に説いてあるけれども、この一言を以て、世間の道徳と佛敎の信仰を本にしておこる道徳の相違は、説き得て頗る明かなるものであると思ふ。

(二) 効果の優る點

モウ一つは効果の優る點であるが、佛敎の道徳はその効果がまことに普遍的に現はれて來る譯である。殊にその道徳の人を悦ばす力、悦びに依つて人生の苦難をさり聞いて行く力に於て非常に優れて居るのである。それは儒敎に於ても道徳がだん／＼に進んで行けばさういふ悦びの力になる、孔子の如き



は「子の燕居するや申々如たり、天々如たり」と言つて、ニコ／＼して居られたものである、人間が苦蟲を噛み潰したやうな顔をして居る間はまだ道徳は未成品である。顔回は「疏食を飯ひ水を飲み膳を曲げて枕とす、樂み亦其の中に在り」といふ、その樂んで居る所が道徳の完成である。日本の軍人の心得でも、欣然として國事に斃れるといふ所にその覺悟がある。「彈丸に中つては堪らない、どうしたら命が助かるか」……それでは駄目である、喜んで死に就く所まで行けばそれが軍人精神の完成である。所がそれがなかなか難かしい、道徳の方からは孔子の三千人の門弟中、顔回一人それを得たので、餘の連中はそこまで至らなかつた譯である。これが佛教の方で行けば、法悦の力といふものは誰にでも得られる、「上中下根等しく法雨に潤ふ」で、釋迦の教に來つた者はみな法悦の心に活きる、法華經の末文にも「皆大歡喜作禮而去」と説かれて、皆な大いに歡喜し

たのである。道徳の方から行けば顔回一人、膳を曲げて樂みを得た、その「一人」といふのと「皆」といふのとの違ひがある、これは大變な違ひである。道徳の方から行くに、昔は顔回が一人居つたけれども、今は一人も居らぬ、或るさき途中でまごついてしまふやうな譯である。だから儒教の道徳では法悦の力といふものはなかなか出て來ない。道徳は悦ぶ所まで行かなければ力を生じて來ない。論語でも一番初めは「學んで時に之を習ふ、亦悦しからずや、朋有り遠方より來る、亦樂しからずや」と言つて居る、即ち悦しからずや、樂しからずや」といふ所に言ひなれば道徳にならない。今の日本でやつて居る道徳といふものは窮屈なものであつて、やらなければならぬ、斯うしなければならぬと言ふだけのことである、それではまだ本當のものではない。所がその悦ぶ力といふものがなかなか世間の道徳では出て來ない、だから學校でいくら道徳を

教へても、道徳をやるのが面白いと言ふ者は一人も無い。佛教の方に來たならば、どんな信者でも先づ有難いといふことになつて掌を合せて居る、必ずや法悦の力といふものを得るのである、それは得ない者もあるけれども、そんなのは宗教といふものを知らない猿みたいな人間である、掌を合せて居ると言ふけれども猿みたいに眞似だけして居るに過ぎない。本當に心に有難いと思つたならば、その時にモウ法悦の力といふものがキツト出て來るのである。それは何處から出て來るかといへば、前に申した人間の生命の滅びないといふ事柄、因果應報の理、佛の護つて下される事、自分の佛性の閃きのある事、その他いろいろ、優しい、有難いやうな話が一パイあるから、「あゝ有難いな」といふ氣分が湧いて來るのである。

そこで法悦の力を得るから、その法悦の力が道徳を行ふ原動力となつて行くのである。殊に今後の社

會は、法悦を有しないやうな人間は道徳を行ふことは出來ないやうになる、道徳を一通り行はうと思へばどうしても物質上に於て多少不利を忍ばなければならぬ、それが嫌やだといふので、彼奴がさうするならば此方も斯うする」と言つて、痾癩を互格に振り廻して行くやうになつたら道徳といふものは行へつことはない。所が今の時代は多くの人間はさうである、向ふがさうなら此方も斯うやらなければ損がゆく、權利利益の争奪の世の中や」といふのでやつて居る、殊に商賣の狀態を見るとサウ思ふ、何でもない事に随分高い錢を取られる、その代りにこちらも取れるだけ取つてやれといふやうなことになつて居る、醫者なども、なか／＼藥禮を高く取るやうである、チョット入院してもスグ十圓、十五圓、高い所では二十圓も掛るといふやうな譯であるが、その代りに又自分の息子を學校へ入れようとする、學校の方でウンと取られる、醫者あたりに入學しよう



とすると、裏面からいろ／＼な寄附を言うて来る、それも百圓や百五十圓では濟まない、少くとも千圓、少し流行る醫者になれば二千圓といふやうに取られる、それが寄附が出来ぬといへば「どうも今満員になつて居りますからお宅の子供さんの入學はお断りしなければなりません」と言はれてしまふ。何處も彼處もさういふ風に奪取合ひをするから、お寺なども黙つて居つたならば、お布施はドン／＼減らされてしまふ、「どうも醫者の方に澤山取られましたので、これで一つ……」と言つて、ダン／＼少くしてしまふ、それではお寺は飯が食へない。そこでお寺の方でもチャント等級を拵へて待つて居る「イヤ貴家のところはそんな事では葬式は出来ません」と言つて談判をして居る、ナカ／＼えらい騒ぎである、それをやらなければ東京の坊さんは飯が食へぬといふことになつて居る。

斯ういふ世の中に立つて正しきを行ひ、善を爲さ

んとするといふことは、確かに熱焔の内に立籠つて居るやうなものである。日蓮聖人は、今日の世の中は鐵も熔けるやうな時代である、その熱火の内に處して尙ほ熔けないやうな覺悟が無ければ信心は出来ぬと言はれたが、今後の社會に處して人が本當に道徳の光を顯はすには、所謂熱火の内に熔けない鋼鐵の如き決心を有たなければならぬ、それには宗教を以て鍛えない限りには駄目である。宗教を以て鍛えた人間であれば、この熱火の如き時代に處しても道徳を行ひ得るのである、モウ戦ひはその一點である、宗教が必要であるか、必要でないかといふやうな、そんな手ぬるい話ではない。熱烈なる信仰に生きて、日蓮聖人が頸の座に坐しても尙ほ且つビクともしないやうな、あの偉大なる力の宗教、白及首に臨むの時、「これほどの悦びを笑へかし」と言つた彼の強い意志を以て戦はなければ、今後の世の中は渡れないことになる。學校の教育でも、さういふ所を

押へて、「此點だつ」といふ所を強く打込めば宜い、平凡な事をいくら言つて聞かしても此の激しい時代には役に立たぬ、「日蓮が正義を憤りて頸の座に坐して白及首に下るの時、泰然として笑つたといふ力、此の力をお前等も得なければいかん、それが解らぬやうな者は修身は零點ぢや」といふことになれば、生徒の方でもビリツとする。さういふ工合にモット強い所を打込まなければ、ゴタ／＼と徳目などを並べ立てても無駄な事である。釋尊はそれを言うて居る、信なくんば一切の善根は力を喪ふ、彩色に膠なきが如しと言ふのはそれである。

この法悦の力を根本として此の世に處するならば、日蓮聖人の如く、如何なる迫害の中にも悦びを喪はない、佐渡が島の雪の中に苦しんで居る時も、その正義の觀念を貫き通された、日蓮聖人一代の行動はまことに明瞭なる事である、あれが本當の道徳實行の模範ではないか。楠木正成も偉いけれども、

淡川で討死するといふあれだけの事實では、今後の日本人を指導することは出来ない。寧ろ日蓮が頸の座に坐しても頸斬れず、佐渡が島に於ても雪の中に凍えず、而して迫害多難の裡に正義を貫き徹して、泰然として「これほどの悦びを笑へかし」と御勸氣を蒙むればいよいよ悦びを増すべし」と法悦を謳つたところの氣概を國民にヨリ多く知らしめたならば、實際の人生の百般の實生活の上にモット効果があるのではないか。勿論楠公の事蹟も我が國民性を飾る歴史の華として没すべからざるものであるけれども、戦をして腹を切る事ばかり教へても、平生日常生活の上で直接の力が無いことになつてしまふ。忠臣蔵の事蹟も宜いけれども、御主人の敵討ちばかり考へて後ろ鉢巻をして飛び出す事ばかり教へても足りない。日蓮聖人のやうにこの人生々活の中に日々の奮闘努力を示されて、物質の欲乏と迫害の裡に精神生活の大勝利を示された彼の實例が、寧ろ現代



人の道徳生活を教へ導く所以であると信するのである。

新様な意味に於て佛教の道徳は非常な特色があるといふことを御紹介した次第であります。(了)

誌料領收 自八月三十一日 至九月二十日

一金拾圓也	北海道	木原文	靜殿
一金六圓也	札幌	本澤隆	正殿
一金五圓也	山梨縣	山本禮三	郎殿
一金壹圓也	青森縣	柏木吾	市殿
一金貳圓貳拾錢也	津山	波逸	孝殿
一金九圓六拾錢也	京都	有田宏	道殿
一金參圓五拾錢也	川崎	廣瀬	調殿
一金參圓也	東京	大河原	徹殿
一金壹圓貳拾錢也	同	青山信	市殿
一金四拾壹錢也	東京府	小山直	子殿
一金貳圓貳拾錢也	同	中	市殿
一金貳圓貳拾錢也	門司	津田信	子殿
一金拾圓也	東京	谷山靜	邦殿
一金貳圓貳拾錢也	福岡	熊澤	優殿

一金貳圓貳拾錢也	台	五十里	子之作殿
一金貳拾壹錢也	山梨縣	杉野	悅郎殿
一金八圓也	同	平松林三	郎殿
一金四圓五拾錢也	神戶	熊井本	光殿
一金貳圓貳拾錢也	横濱	川島	よれ殿
一金四拾圓也	伊東	川村幸	重殿
一金八拾壹錢也	名古屋	清水一	乘殿
一金參圓貳拾錢也	同	荒川て	う殿
一金壹圓貳拾錢也	大阪	増田智	雄殿
一金拾五圓也	同	片岡しづ	殿
一金貳圓貳拾錢也	東京府	御厨正	幸殿
	同	上田義	信殿
	大阪	古島徳次	郎殿

「統一」會計

道徳と信仰と誌料の領收といふことも又直接の問題として會計子は大に痛感致す次第であります。た互に忘れたり滞りのないやうに徳義を重んじやうではありませんか。

天風三萬里紀行 (其十三)

小林日種

十三、濟南府

六月一日

朝から岩瀬氏御夫妻が見えられ御世話下さつた。岩瀬氏の奥様は、長春經王寺の谷口慈詳師の姉君で有る關係上、私が此の人を頼つたので有つた。

午前中は戸塚君の案内で、領事館に西田總領事を訪ひ、又居留民團長の高國謙吉氏邸を訪ねたりなどした。

午後からは岩瀬氏が岩井正雪氏を伴つて見えられ、戸塚氏を加えた四人の一行で城内の見物に出た。

濟南の街は本當に狭い街だつた。其處を泳ぐやうに一杯人が歩いてゐた。何とも名状しがたい喧囂の聲が其の界限を占領してゐた。素晴らしく高い城壁が古代的な威壓を見せて、カ

ツキリと仕切つてゐた。城門の内外をウヨ／＼と押し合つてゐる群衆の喧々囂々たる光景、それは直ちに支那の太古を彷彿せしめる。腕車も馬車も此處では何等近代的感觉をもつてゐない。凡ての人間は封建制度の偉大な権力を象徴してゐる城門の下に蠢めてゐる蟲のやうなものに過ぎない。

何と云ふ混乱、何と云ふ無秩序だらう、——、そして是は明かに支那以外の國では全く見られない光景である。然し、とにかく支那の國民はかう云ふ状態には馴れ切つてゐるのである。どんな混乱の渦中に置かれても驚かないだけの餘裕が有るのである。一見無秩序に見えてゐるが其の奥には常に一種の統制が在るのであるまいか。支那の民族が五千年を通じてあらゆる災禍や、迫害にあひ乍ら滅びないばかりか、ますます發達して行く原因も此處に在るのではあるまいか。



さう思つて見ると、混乱の中にも或る長閑さがあり、喧囂の中にも或る平靜さがあるやうだ。私は知らず識らず彼等と同じ気持ちに化せられて行くやうな気がした。城内をグル／＼廻つた後、漸やく城の内外北隅なる大明湖に近付いて来た。市街地を離れて此の邊へ来ると、いくら濟南府の内でも、もうまるで田舎である。

人寰を離れた天景は雄大とか廣濶とか云ふ點で我々の心を捉えるので有るが、雜沓喧騒の都市を過ぎ、村落が點景になるやうな静かな景色に急に相対する時、人は反つて人生から来る寂し味が加はるやうに思えて、又別種の興趣を感じるものである。

此處は太公望呂尚の釣糸を垂れた遺蹟である、尤も人によると、太公望釣魚の本趾は淮水だと云ひ又、五聖街を北に行くに外城の護城河に出るが其の近くに黒虎廟（今は女子小學校になつてゐた）と云ふのがあり、その中に昔有つた黒虎泉だと説く人も有るので、實は煩を厭はず兩方に立寄つて来たのではあるが、今見て、大明湖の方が遺蹟の香が濃厚であるを感じた。何れにしても河川ではなく湖沼で有つた

のは事實らしい。私が何故、そんな太公望の釣魚の蹟の探索に熱注するのであらうと、戸塚君や岩瀬君は不審氣であつた。

「明日になれば解りますよ」とニヤ／＼してゐた。蓋し明日は日本人會で釋明を試みる意志なるを仄めかしたのである。

余が太公望に傾倒するは實に久しい。蓋し太公望の釣魚の話は余が講演中の十八番物で有らう。故に濟南に行つたら是非ともその蹟を探り、そしてその十八番も間がよかつたら開陳に及ばうとは實に久しい間の願で有つた。

今、久懸のその蹟に對し、而して畫舫を賃して自からその湖中の人となつた。

湖に向ふ者の心の静けさ、自分が怎ふ云ふ目的で来たかも知れなくて、突然、湖中に浮ばせられたものゝやうな気がする。びつしや、びつしやと鼓底へ忍び寄るその音が楽しい囁きとなつて耳から胸へ、胸から體軀全體へ軽く行き亘る。浅い水の中から岸へ續いて一面に生えてゐる緑の蘆の葉が光を反し、

人の魂をその中へ吸ひ込むやうである。心を引き締められる心持、固く唇を結んで見張る心持、それは大明湖の與えてくれる、いのちで有つた。私はなごみ返つた氣持で暫く水面を見つめてゐた。

そしてはしなくも心を少年時に誘つた、そして更に回顧の情を呂尚在世の太古に馳せた。

最初私が支那と云ふものを頭に入れたのは馬琴蘭山譯の水滸傳で有らう、それから文章軌範では赤壁を知り、岳陽樓から觀る洞庭湖の澎湃たる水を知り、史記左傳では帝王の都城を知り、人の巧智を知り、黄河、揚子江の流れの大なる事を知り、唐詩選三體詩では山川沼湖、野坡池塘の景色を知り、詩人の風懷を知つた。然しそれにも増して私に支那といふものゝ興味を喚つて呉れたものは實に太公望呂尚の傳記であつた。多くの昔育ちの少年がさうで有るやうに、私も幼少の頃は史記列傳を耽讀したものである。

史記の記す所によると、太公年老いて窮困し漁釣してゐた。その國主西伯一日獵に出でんとし。龜の甲を灼いてその吉凶を卜した所、

「獵る所は龍でもなく虎でもなく熊でもなく、實に霸王の輔である」と云ふ卦を得た。茲に於て文王獵し果して太公に渭水の北に遇ひ共に語つて大いに喜び、

「我が亡父常に聖人あつて周に適くべく、周はこれによつて興るであらうと、云はれたが、あなたは眞にその聖人であらう、吾が太公があなたを望む事は既に久しい間である」と云ひ、之を號して太公望と稱し、同車して共に歸り、立て、之を師としたと云ふのである。眞直な針で釣魚する事三十年、遂に宰相の位地を釣り得たと云ふ事が年少の自分の興味を唆つたものらしい。然し乍ら何故ぞと云ふ事は知られてゐない。故に餘り語られてゐない筈である、其處を當て込んで明日話さうと云ふのである。演題は既に山東新報紙上を借りて「太公望と日蓮主義」と發表してしまつた。矢は絃を離れた、果して怎んな演説が出来て、どんな人氣を釣り當てる事やら、その夜は客を謝して早く寝ね褥中に在つて晩く迄腹案を練つた。



# 記事

## 野口上人の來信

(第十五信)

謹白 各位彌御清祥奉大賀候小柄其後又々腹痛にて無音相成候

巴里より二三申上候

一、シルバンレビ博士に御目に懸り博士の基督教、佛教、儒教に關する高説拜聴且つ間に任せ日蓮主義を二日に渡り説明致候

一、大學講演も大に賛成(目下暑中休暇)相成此十月中旬中エリセフ先生通譯日蓮主義講演開催の事に候

一、佛國寺も佛蘭西政府は既に地所提供相成候も日本の寄附不纏候爲め延引相成居候日本國富豪の方々四五名御骨折被下候は早速出來上り可申然る上は歐羅巴は勿論米國迄も響き佛教の研鑽起り佛教興隆の基とも可相成候況や日本國藝境内に大講堂客殿寄宿舎も設け候は日本留學及觀光團の便宜も宜敷と存じ候

一、國立圖書館レビ博士の紹介にて圖書館長に逢ひ紀元七

八世紀頃の珍書種々拜見致候藏書六百萬冊内五十萬冊は手書之由に候兎に角總て整へたるものに候

一、ギセー博物館エリセフ先生案内にて拜觀候是は當地の財産家ギセー氏宗教統一意見より資産を投じ東洋及世界各國の宗教に關する圖書彫刻を集めたるもの今は國家に寄附せし由寄附の事に候日本も如是特志者の續々現はれ候事希望に不堪候

一、大戦々死者追弔會巴里鎮旋門内にて舉行此日警視廳より警官七八名立會遺族數十人參列嚴かに肅かに候これ世界平和皆具佛道の趣意に候

一、日本人墓は巴里市内の墓地に散在との事にて廻向に廻り候これ同胞慰問の意なり

一、日本國靈回向セーヌ川邊にて讀經致候  
月冴ゆるセーヌ川の畔より

遙かに祭る日の本の靈

一、揮毫會内外人に傾ち候其他内外人に下種宣傳隨み居候從是獨逸及各地に廻り再び巴里に還り十月末若くは十一月始めマルセーユより船にて印度入國の豫定に候先は右迄書外又々可申候

遙祈各位之健康候

南無妙法蓮華經

八月五日

巴里にて

日

主 拜

(第十六信)

九月十六日左の電文受信

病氣全快した、今から印度へ立つ。

後援會各位 統一記者殿  
中外記者殿 顯本教報記者殿 其他各位殿

## 教 報

### ○東京統一團本部教戰錄

△八月廿三日夜 本所御赤町公園傍道路布教

開會七時、當夜の出席講師、梶木顯正、本

田健二、村田顯明の三氏來聽者六十餘名

△九月三日晝 上野公園道路布教、開會午前

十時、當日の出席講師、高矢休教、梶木顯

正、村田顯明の三氏來聽者八十餘名

△同十三日晝 上野公園道路布教、開會午前

十時、當日出席講師、梶木顯正、磯部滿事

十時、當日出席講師、梶木顯正、磯部滿事

小西日喜、松岡林造、大園庄太郎の五氏外

に東洋大學生村田顯明君奉仕せり。來聽者

百廿餘名

△同十四日(日曜)講演會中(休暇明け開會)

第二日曜、午後一時半開會、講師講題左の

如し、「國歩艱難の秋」田中道爾氏、「無礙の

至樂境」小西日喜、當日は岩野少將と京

△同十八日(雨)地明會例會 午後一時半開

會、始めに法要次に會長本多親下の下記講

題の下に講話があつた「日蓮聖人の人格、

經歴、教義、主張」當日來會者八十餘名。久

々で一堂に會した事とて積る話に時の移る

を知らず、夜は本多親下を中心として同師

會晚餐會談約三時間、打くつろいで語り

更かした。

△同廿一日(晴)第三日曜、知法思國會主催

國民教養講座最終の會合、「佛教の本質と其

價值」と題して本多親下には約二時間健康

辨れられざる中熱心に御教示下さつた。

來聽者二百廿餘名、因に河合勝明氏當夜九

時の列車で歸洛された。

△同廿三日晝 上野公園道路布教開會午前十

時、當日の出席講師、梶木顯正、磯部滿事

松岡林造の三氏彼岸の事とて來聽者八十餘

名

○正法寺便り(牛込區早稲田南町)

九月十四日例會午後五時半メガン隊出發途

中雨に降られ、山岸照吉外三四名傘持參あ

り、二組に分れ雨中宣傳した。聽衆六十餘名

講題及講師は

強く生きる道 大園庄太郎氏

放逸と精進 猪又金太郎氏

安樂行に就て 齋正 木村 日保師

○報告十月 秋季大會十二日第二日曜日午後

七時 講題及講師 會場正法寺

御利益とは何か 山岸 照吉氏

入信の動機 坂本 米吉氏

未定 大多和貞子婦



道しるべ曰く 木村 敬之氏  
日蓮とは如何なる人が 眞正 木村 日保師

○京都活動誌

- △夏安居會、八月一日より五日まで五日間妙滿寺本堂に於て左の如く催された。
- 一、勸行……午前五時四十分より六時まで
- 一、講義……同 六時より七時まで
- 講本は優婆塞成經、講師、本山部長川崎英照師、聽衆は毎朝四十人乃至七十餘人にして盛會。
- △八月一日、國語會午後二時より妙滿寺
- 一、最善の信仰 土持 貞達師
- △八月七日、小善庵にて午後七時半より
- 一、慎を發して食を忘る 長谷川聖學師
- 一、住み善き世界の建設 川崎 英照師
- △八月十一日、午後七時半より妙滿寺方丈
- 一、佛道教經講義 川崎 英照師
- △八月十三日、午後二時より妙滿寺本堂
- 一、法華經要文講義 川崎 英照師
- △八月十五日、「街頭宣傳」夜出町にて
- 先づ富永東一郎氏開會を宣し信仰の必要を力説し、藤山本成師宗教の選擇基準を明らかにし、次で長谷川聖學師現代の世相と日蓮主義に就て激論し、河合妙明師東西兩文明を學理的に批判討論し東洋文明の卓越せる所以を論ず、長谷川聖學師の開會の辭並びに正法興立皇道繁榮を願ひして十時半開散。
- △八月二十一日、本正寺施餓鬼

一、五關堂會に就て 上田 智暲師  
△八月二十二日、久遠寺施餓鬼 吉塚 通暲師  
△八月二十四日、寂光寺施餓鬼 長谷川聖學師  
一、最大一の法、法華經 長谷川聖學師  
△八月二十七日、小善庵にて午後七時半より 藤山 本成師  
一、開會の辭 藤山 本成師  
一、水舟を浮べ 金光 孝順師  
水又舟をくつがへす

○納涼日蓮主義大講演會

東山の一角に登り先づ京洛の天地を望見せよ、佛國雲を連ね經藏軒を並ぶ、爾者竹葉の如く但は稻麻に似たり、然れども心ある者、何人も佛法の寶珠を見て浩然として涅槃する能はざるは何事ぞや、佛法は體の如し世間は影の如し、日蓮聖人の聖語を拜する時に、こは何人の罪なるやと大喝を發したくなる、覺れよ！ 醒めよ！

大衆は熱烈に宗教の法悦安住を求めてゐる、我等は彼等に死にもぐるゐて與へればならぬ。彼等が宗教家になってゐるものは、決して、パンでもなければ金でもない、法悦安住なの。

此の時此の聲我が顯本京都寺院に於ては、七月二十五日より二十九日まで時代適應の野外天幕大講演會を開催せし事は先月報せし如くなるが、其の聽衆の熱心なる効の大なるに感奮せし我等は第二線戦場として、八月二

十一日より二十五日まで五日間妙滿寺境内に  
大天幕を張り肉迫歌謡を行ひたり。  
各講師の熱火の辯、躍動する心を制して感  
激の内に遊ぶ二百餘の聽衆、紙筆外の光景な  
りき、毎夜十時講演終るや或は質問に或は彼  
等の情みの告白に、或は御禮に、或は實踐に  
其の熱心の程我等の信仰を倍増せり。  
五日間の講演終るや「合掌甚深なる法話を  
五日間拜聴致さして頂き難有難んで各御講師  
様に御禮を申し上げます、御座様に小生も日  
蓮聖人の尊さを知り法悦を感じ、無上なる釋  
迦牟尼佛に歸依する身となりたる果報を、日  
夜に悦び居ります、此上共御指導の程願上ま  
す」の如き數十通の御禮の投書あり。  
△八月二十一日  
一、開會の辭 長谷川聖學師  
一、化城產品の一節 藤山 本成師  
一、信に入る道 上田 智暲師  
△八月二十二日  
一、但だ無上道を書む 玉島 英龍師  
一、日蓮主義とは何ぞや 有田 安道師  
一、聖人に何をか學ばん 金光 孝順師  
△八月二十三日  
一、大聖釋尊の名教 河合 妙明氏  
一、真心に還れ 吉塚 通暲師  
△八月二十四日  
一、希望に輝く人生 土持 貞達師  
一、法華一乘の義 川崎 英照師

△八月二十五日 長谷川聖學師  
一、日蓮上人と日本國 川崎 英照師  
一、法華一乘の義 有田 安道師  
一、開會の辭 (以上長谷川報)

○京都健兒會報

- △八月三日 午前九時より妙滿寺講堂
- 一、無智なる人間 長谷川聖學師
- 一、名を残せ 土持 貞達師
- △八月十日 吉田末次郎先生のお話 土持 貞達師
- △八月十七日 同 土持 貞達師
- △八月二十四日「御佛禮」 同 土持 貞達師
- △八月三十一日「正直の徳」 同 土持 貞達師
- △八月三十一日午後六時廿分より天幕内にて
- 一、開會の辭 土持 貞達師
- 一、死の身代り 古川 先生
- 一、花子さん 山田 先生
- △八月二十二日 長谷川先生
- 一、名入ビワ師 土持 先生
- △八月二十三日 吉田先生
- 一、をしどりの歌 土持 先生
- △八月二十四日 玉島先生
- 一、變なお経 古川先生
- △八月二十五日 古川先生

○大阪堂間寺教報

○七月九日 橋本宅にて  
法悦の生活 京藤 布教師  
○八月十二日 堂間寺にて  
開會の辭 京藤 山主  
新時代の佛教 大泉 孝龍師  
人類文化の要義 川崎 本山部長  
○八月二十二日 堂間寺にて  
人生生活の要義 京藤 義暲師  
○八月二十二日 天王寺公會堂にて立正結社講演  
會開會の辭 和井田寛丹氏  
佛敎の指導原理と法華經 中川 文學士  
○八月二十二日 堂間寺にて  
五關堂に就て 熊井持命布教師  
○九月一日 堂間寺にて社會教化講演  
日常生活の淨化 大泉 孝龍師  
國民精神の頌奏 京藤 義暲師  
○八月五日 阿波産俱樂部にて  
開會の辭 富 永 師  
現代の世相を省みて 京藤 布教師  
○八月十日 矢野鐵工所にて  
二世一貫の大道 京藤 義暲師  
○八月十二日 堂間寺にて  
東半球踏破漫談 石 井 君  
時代信に就て 大泉 孝龍師

○北陸 教報(八月分)

以上何れも盛會多大の効果あるを信す。

△八月二日 家庭講話 若杉氏宅にて 能仁 一十師  
完き者を見つめて 藤 啓純師  
△八月三日 高木 信行寺にて 藤 啓純師  
現代の世相を眺めて 北陸線にて  
△八月六七日 織河講話 能仁 一十師  
労働は新篇なり 古谷 行進師  
△八月七日 鷺江町 信解會にて 藤 啓純師  
我を失ふ者あり 藤 啓純師  
微笑の生活 藤 啓純師  
國民の三大思想 藤 啓純師  
△八月八日 佛教講演 本光寺にて 兒玉 日見師  
毎日の悲願 本郷常次郎氏  
△八月八日 二日市にて 兒玉 日見師  
現實に生きよ 藤 啓純師  
我心に求めよ 藤 啓純師  
向夜間境内に於て納涼會講演を聞く盛大  
なり  
△八月九日 立正閣講演 本郷常次郎氏  
△八月十日 今庄 善壽寺にて 本郷常次郎氏  
△八月十二日 今庄 善壽寺にて 本郷常次郎氏  
時勢の根本 白部 泰學師  
思想の基準 長 美明師  
△八月十五日 山内 本行寺にて 藤 啓純師  
精神生活と佛教 藤 啓純師  
△八月十六日 立正閣講演 本郷常次郎氏  
所感



編輯室より

「曇ら寒さも彼岸まで」と云ひますが、虫の聲も一雨毎に遠ざかり、名物の蚊軍襲来もあとを絶ち、晝間の煩雜から放れた静かな空に明月を仰いで、の讀書や執筆の妙味はとも信心と同じやうに、口では申し述べ難い妙境で、本誌の愛読諸氏は必ず御體験の事と思ふ。日下祝下の平易な中に幽玄な深義を含まれた、其一字一句を漏らすまいと、我を忘れて本誌を反覆熟讀下さることは有難いことですが、それが必ず我身の血となり肉となつて手足の活動に資し、そこに淨化された自己となり、自己の淨化は家庭の淨化となり、やがて延ては社會國家一切の淨化實現を見ることでありませう。經には「我此土安穩天人常充滿」とあります。

本誌毎號、日生祝下の卓説が六かしいとお考への方が萬一ありませば、それは御了解出来るまで儘ます届せず五通でも十通でも御精讀下さい、「讀書百遍意自通ず」とこと請合であります。簡單に落着や講談のものやうに、ハ、アと軽く頭腦にひいたものは直ぐに消く失せませす、深い強い努力の拂はれた仕事は永久に残つて何等かの用を辨する道理でしょうから、文句の末端に執はれず、どうか其のよい處をお探下さい、信心に信敬して疑念を生ぜず、具足の道を聞く」ことでありませう。

「一冊の統一誌に依つて救はれた人々が鹽分あります。統一誌が信仰の力を與へてくれぬとか、理論に傾いて信心の實際方面は高すぎて手が届かぬとか云ふ人ありとせば、それは本氣で本誌を精讀されずに孔探しのやうな疑心があるからではありませうか、信心は疑心で居るで、タ餅を食せて貰ふやうなものではない、凡俗から最後佛陀へ進まうとするのだから精進努力を要すること無論の話、放逸な財色の二欲信心といふやうな者は墮於惡道中と如來善量品に教誨されて居る。

教に接觸せず單信口唱で救はれようとするのは、念佛も唱題も差ばない純他力本願で、日蓮門下には許されない苦、佛敎は「信と解と圓通して方に行の本となる」のが原則であり、一心欲見佛不自信身命の精進が信仰の定規でありませんか。國家今日の紊亂も、經濟の行詰りも、生活難も其の根本は人々の懈怠懶惰が最大因となつて居る、之が救済は第一敎にあるを惟ふ時に、法華經の精進、日蓮聖人の現實敎示を特に叫ばざるを得ない。

不況で萎縮するは無信開提の徒業である。苟も日蓮聖人の門下と名乗る者は一人も離し思はるべからず、各師子王のやうな心で、この困難頓發に遭ふて、上下舉措を失ふの秋、毅然としてこれ大法光顯の先兆なり是れ程の喜び笑へかしと、秋氣清い朝、特に各位の戮力御援接を切望致します。(滿生)

- 八月十五日 本覺寺にて 本郷常次郎氏 宗教の通弊
- 八月十六日 山内 本行寺にて 白部 泰學師 國民的懺悔
- 八月十七日 南居 妙正寺にて 藤 啓純師 心の實第一也
- 八月十七日 眞の人間生活 兒玉 日見師 日蓮上人の教義
- 八月二十三日 家庭講演 林氏宅にて 白部 泰學師 人間性の發露 藤 啓純師
- 八月二十四日 青年團講演 龍雲寺にて 泉 大 佐 如來の計畫 林 少 將
- 八月二十六日 本長寺にて 能仁 一十師 強き人強き國 本郷常次郎氏
- 八月二十八日 家庭講演 河合宅にて 能仁 一十師 日蓮上人の教義 能仁 一十師
- 八月二十八日 生活に祈る 能仁 一十師
- 八月三十一日まで 浦一ヶ月間 井 市野總前に於て左の演題の下に交代市民に 叫び偉大なる効果を挙げた。

現代の思潮に就て  
 教化の徹底に就て  
 思想の根本に就て  
 國民の三大自覺

古谷行進師  
 長 美明師  
 藤 啓純師  
 兒玉日見師  
 以上



# 本多貌下著書 (在庫品)

- 法華經要義 定價金參拾四錢 送料拾二錢
  - 日蓮主義の本領 定價金貳圓五拾錢 送料拾二錢
  - 日蓮主義の心髓 定價金壹圓八拾錢 送料拾二錢
  - 日蓮主義の精要 定價金壹圓五拾錢 送料拾二錢
  - 聖語錄 定價金貳圓 送料六錢
- 以上「教」發行所へ御申込に限り定價の一割引、外に要送料
- 施本用小冊子
- 本感應妙を信じて 一冊八錢 送料三冊迄
  - 法國冥合 同 前

## 「教」發行所

東京市外南品川町妙國寺内  
振替東京一〇九四〇番

料告廣一統		價定一統	
四分	一頁	一ヶ年	金貳圓貳拾錢
一分	一頁	半ヶ年	金壹圓貳拾錢
五分	一頁	一ヶ月	金貳圓貳拾錢
五分	一頁	送料共	送料共
五分	一頁	送料共	送料共
五分	一頁	送料共	送料共
五分	一頁	送料共	送料共
五分	一頁	送料共	送料共

昭和五年九月廿四日印刷納本  
昭和五年十月一日發行 (第四百一十七號)

神奈川縣横浜市磯子區磯子町廣地二四八  
編輯兼 磯部 滿 雄  
發行人 鈴木 日 雄  
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地  
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所  
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ  
振替東京五一〇七一番

第四百一十七號  
第四百一十八號

## 目次

- 慈悲と報恩 ..... 本多日生
- 天風三萬里紀行(其十四) ..... 小林日種
- 記事
- 野口上人の飛鳥
- スター博士結縁懇談會
- 各地教報
- 誌料領收

第三十五年十一月一號

# 統一

